

謡曲のなかの九州王朝

梶原 宣俊



「女郎花」「龍田」「芦刈」「弱法師」「国栖」「小野小町」「桜川」の謡曲に九州王朝の名残を指摘している。

一部を紹介すると、「鶴亀」（喜多流では「月宮殿」）は、猿楽の原本を典拠としたもので、謡曲の中には西暦六百年代の古いものが含まれていると指摘されている。これは、新春中国の朝廷で四季の節会の事始めが催され謡われたもので、私も新春には必ず謡うものである。この中に「官人駕輿丁、神輿を早め」という文言がある。この駕輿丁は福岡県若宮町に残っている地名である。若宮町は私の母の里であり、私も訪ねた時に「駕輿丁」という奇妙な地名が残っていることに不思議な気がした記憶がある。

著者の新庄千恵子さんは、東京在住で長年謡曲を学ばれ、同時に古田武彦の「古代史研究会」で学ばれた方である。古田武彦の「九州王朝説」に基づき、つぎのような謡曲に九州王朝の名残を指摘されている。

それは「鶴亀（月宮殿）」「淡路」「弓八幡

新庄は、九州王朝が香椎宮へ参拝したときの謡ではないかと指摘している。博多千代の御殿へと向かい「長生殿へ目出度く還御」と

一、はじめに

二〇二〇年の春、出水市図書館で偶然このタイトルの本に出合った。

私は、能謡曲を二十年やっているのでこのタイトルに魅かれたのである。早速読んでいくと、きわめて興味深いものであった。

謡はなっている。私は福岡出身なので千代町も香椎宮もよく知っている。新庄は、鶴と亀は、松梅ともに九州王朝の象徴（謡曲「老松」にもでてくる）であったと推測している。

同様に「淡路」という謡曲は、紀の國は佐賀県北部、伊勢志摩は糸島、淡路島は博多湾の能古島と考えると非常にわかりやすいと述べている。

新庄は、この謡曲の原作者は九州王朝における歌謡詩人であり、白村江の敗戦より前の人で、記紀成立を知らない人物であったという。「大八洲」とは、伊弉諾・伊弉冉の創った四つの陸地と四つの海のこと、それはみな九州にあったと述べている。

「紀ノ國」は佐賀県北部のことであり、和歌山が紀ノ國と言われるようになるのは、記紀編纂後七二〇年以後であると指摘している。

「伊勢・志摩」は筑紫の糸島で、「日向」は筑

紫の日向（福岡県高祖山、日向川あり）で、淡路島は博多湾にある能古島であると述べている。能古島は、私も行ったことがあるなじみの島である。

謡曲「蘆刈」は佐賀県の芦刈で、さらに万葉集は九州で歌われたものが多いことを古田史学が証明しつつある。確かに、そのような視点で謡曲を読むと理解が深まると感じた。

同様に、謡曲「弓八幡」に出てくる「高良の神」は福岡県久留米市の高良神社であることを指摘している。

後半は、「通説」を疑い、古田の九州王朝説や「古事記」に基づき、近江は「淡海」であり、淡路、淡路島も博多湾のことであると述べている。さらに「紀ノ國」とは佐賀県のこと、卑弥呼はその紀氏の姫であった等々驚くべき内容である。私はこの本を通して「九州王朝説」に関心を持ち始めた。

二、古田武彦の九州王朝説

私は、古田武彦の九州王朝説を知ってはいませんが著書は読んだことがなかったので膨大な著書の中から数冊を買い求め読んでみて驚いた。

古田は高校教師で、いわゆる学者ではない。しかし、彼の本は学者顔負けの緻密さと客観的論理性にあふれていた。私も、これまで近畿の大和王朝説を素直に信じていたが、読んでみると「九州王朝説」の説得力に圧倒された。私は学校で学んだ「日本書紀」の話をするのみにしていたが、確かに当時の政府権力が天皇制の正当性を証明しようとしたものではないかという多少の疑問は持っていた。私は、古田を通して日本の古代史に関心を深め、「九州古代史の会」に入会した。

以下、素人なりに古田の「九州王朝説」を要約してみよう。

古田は「魏志倭人伝」や「随書」「新旧唐書」等の中国文献を徹底的に読み込み、「古事記」「日本書紀」の創作を指摘している。その論説は実証的かつ論理的であり説得力がある。そして、紀元前から七世紀末まで日本を代表した政権は一貫して九州にあったことを論証している。

九州王朝の始まりは、後に天孫降臨として神話化される出来事であり、天孫降臨の舞台となった場所は福岡県の糸島周辺である。また九州王朝の前には出雲王朝が存在しており、国造制・部民制の原型は出雲王朝時代から存在していた。

神武天皇は一世紀から二世紀頃に実在しており、神武東征も基本的に史実である。九州王朝の分家として大和王朝（近畿天皇家）は成立したと述べている。

倭王卑弥呼は、伊都国に都し、倭国は福岡

平野の奴国を中心にしていた。卑弥呼は筑紫君の祖であり、倭の五王も九州倭国の王である。筑紫君磐井は、九州の王であり、継体は九州南部の豪族熊襲隼人で、筑紫磐井の乱は九州倭国に対する反乱であったという。大宰府は、六一八年から九州倭国の滅亡まで、九州倭国の都であり、日本最古の風水の四神相応を考慮した計画都市であった。

「白村江の戦い」では、九州倭国の王が捕虜となり敗北した。「壬申の乱」は、畿内ではなく九州を舞台としており、畿内の豪族大海人皇子（天武天皇）が介入し、日本列島の覇権を得た事件である。

戦乱により九州の豪族は滅亡し、畿内に天皇（高市王子）は移った。

「大化の改新」は、草壁皇子の子と中臣鎌足が九州年号の大和（大化）元年六九五年に、藤原京で高市天皇とその子を暗殺し翌年に文

武天皇が即位した事件である。

「神武東征」は、六世紀に任那滅亡による難民の一部が九州から畿内に東征したものである。通説で飛鳥時代と呼ばれている時代まではヤマト王権はまだ日本を代表する政権ではなく、畿内の地方政権にすぎなかったが、文武の時代に九州倭国から政権を完全に奪い「日本」と呼ばれるようになった。

「古事記」「日本書紀」は、九州倭国の歴史書であり、「続日本紀」は天武朝の歴史書である。記紀に記されている天武系の天皇は、天皇ではなく畿内の地方豪族である。記紀に記されたその他の天皇は九州倭国の天皇であると述べている。

したがって、万葉集の歌も八世紀までの古いものは、ほとんど九州で詠まれたものであるという。

以上が古田九州王朝説の簡単な要約であ

るが、私にとっては「目からうろこ」の衝撃的なものであった。

私は、歴史が好きで多少は勉強してきたが、江戸、近代史、現代史ばかりで古代史については全く無知であることに気づかされた。これから古代史の闇に挑戦してみたいと考えている。

三、幻の筑紫舞

古田武彦は「よみがえる九州王朝」の中で、最後に「幻の筑紫舞」について詳しく触れている。

筑紫舞は、筑紫傀儡子と呼ばれる放浪の民が古来から伝えてきた神事芸能である。私は言葉だけは知っていたがその内容については全く無知であった。

古田は、西山村光寿斎という筑紫舞の初代宗家と出会い、筑紫舞に九州王朝の名残があることに注目した。筑紫舞は、放浪の芸能集

団として現在まで伝承され、今様、能、狂言、人形浄瑠璃、歌舞伎舞踊等の芸能の原点である。現在でも、毎年一回福岡の大濠能楽堂で上演され、宮地嶽神社でも奉納されているという。私は、コロナが収束すればぜひ見に行きたいと思っている。

古田は、西山村光寿斎に直接会い、話を聞いている。それによると、筑紫舞の中心になる舞は「翁」という舞で三人立、五人立、七人立、十三人立があるという。師匠の菊昌校からは七人立までを伝えられたという。それは肥後の翁、加賀の翁、都の翁、難波津の翁、尾張の翁、出雲の翁、夷の翁の七人で舞うもので、肥後の翁が主役になるという。このあと、延々と古田の九州王朝説を裏付ける筑紫舞の話が続くのであるが、私は、「翁」という舞の名前に驚いた。

実は、謡曲の中に「翁」という一風変わった

た能が存在するのである。これは能の中でも特殊なもので、意味不明の文句が続き、他の能とは全く趣を異にしているのである。まさに神の舞という神聖な能である。私は、福岡時代に山笠の最終日に早朝から櫛田神社に赴きこの「翁」を師とともに謡っていた。山笠の終わりを締めくくると「鎮め能」である。筑紫舞についてはまた稿をあらためて書きたいと思っている。

四、おわりに―わが愛する「九州の自然と歴史」

私は、北九州の八幡区香月で生まれ、飯塚市の立岩小学校に2年通った。今回、その近くに立岩遺跡があることを知り、コロナが終息すれば、六〇年ぶりに訪ねたいと思っている。

三年、四年は父の転勤で長崎県北松浦郡小佐々町の小学校に転校した。

初めて海を見た。自宅も学校も海の見える小高い丘にあり、私は学校から帰ると釣り竿をもってほぼ毎日魚釣りに行った。魚釣りは生涯の趣味となった。海が大好きな人間になった。平戸に近いリアス式海岸でよく釣れた。海辺を走るバスに乗り、小学校に通った。

五年、六年は再び福岡県粕屋郡久山町の小学校に通った。それから高校まで福岡に住んだ。大学は熊本に行き五年住んだ。四年生の時大学紛争で休校になったので、休学して憧れの東京に遊学した。

卒業後は、広島、福山で教育の仕事を三〇年余経験した。定年退職後は。妻の故郷である鹿児島県出水市に住み着いた。七十五年の人生のうち半分以上が九州である。九州七県のうち、大分宮崎以外はみな住んだことがある。

私は九州の大自然を愛し、歴史を愛し、人

間性を愛してきた。九州人は、おおむね人情熱く、あつさりした性格で、行動力があり私の気性によく似あっている。

そこで改めて九州の歴史と風土を学ぼうと考へ「九州の風土と歴史」(山川出版社)を読んできた。この本は専門的でありながらとても分かりやすく書かれている。九州の自然と歴史を学ぶには最適の書であり、九州人にとって必読文献ではなからうか。九州の深い歴史と自然があらためて身に染みだ。

私は九州で生まれ、育ち、死ぬることを心からありがたく思っている。残された人生を最後まで、九州にこだわっていききたいと願っている。

(出水喜多会主宰)



《参考文献》

- ・「よみがえる九州王朝―幻の筑紫舞」古田武彦 (角川書店一九八三)
- ・「邪馬台国はなかった―解説された倭人伝の謎」古田武彦 (朝日新聞社 一九七二)
- ・「盗まれた神話―記・紀の秘密」古田武彦 (朝日新聞社一九七五)
- ・「失われた九州王朝―天皇家以前の古代史」古田武彦 (朝日新聞社一九七三)
- ・「九州王朝の論理―日出ずる処の天子」古田武彦他 (明石書店二〇〇〇年)
- ・「古代九州王朝の謎」荒金卓也 (海鳥社二〇〇二)
- ・「孤高の人・菊邑検校」西山村光寿斎 (市民の古代第十一集一九八九年)
- ・「九州の風土と歴史」川添昭二・瀬野精一郎 (山川出版社一九七七)